

キャリア教育の充実に向けた教育課程や指導方法の工夫改善についての研究

～児童のキャリア発達につながる総合的な学習の時間の在り方について～

本山町立本山小学校 教諭 谷村正一郎
高知県教育センター 指導主事 渡部 英樹

A小学校をめぐる現状把握から、主として「郷土愛」や「学習意欲」の向上が求められていることが分かり、また、先生方は、総合的な学習の時間等の体験的な学習が自校の強みであり、課題でもあると感じていることも分かった。

そこで、A小学校でこれまで行われてきた総合的な学習の時間等の体験的な学習に、「問題解決的な学習」の視点を取り入れて改善を進めることが有効ではないかと考えるとともに、これがA小学校のキャリア教育の中心的な取組として位置付けられるのではないかと考えた。

今回、A小学校におけるキャリア教育の取組モデル図を提案するとともに、総合的な学習の時間において検証授業を実施することで、児童の「学習意欲」等のキャリア発達にかかわる能力が向上し、取組モデル図の有効性を確かめることができた。

<キーワード>現状把握、キャリア発達、総合的な学習の時間、問題解決的な学習、探究的な学習

1 研究目的

(1) キャリア教育の取組の前提となる条件 ～キャリア教育の取組は各学校によって違う～

国立教育政策研究所(2014)は、「キャリア教育の指導計画は、『目標』と『現状』の間にあるギャップから導き出されるものであり、他校における課題を模倣したり、各教員の前任校との比較の視点から課題を設定したりしても、効果的な指導計画の作成には至らない。」と指摘する。(図1)

本研究は、高知県内の各学校への汎用性を意識しながら、A小学校における実践研究を行うものである。

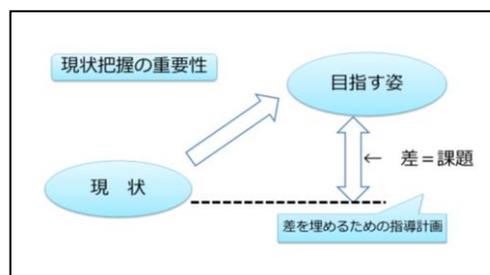


図1 効果的な計画策定までのプロセス

(2) A小学校における現状把握の結果 ～求められている「郷土愛」と「学習意欲」の向上～

今回は高知県の中山間地域にあるA小学校が研究の主たるフィールドである。そこで、まず、A小学校を図2のように、さまざまな視点から現状把握し、キャリア教育に関する課題を客観的に把握することから行った。

また、現状把握の方法については、図3のような具体的方法で現状把握を実施した。

現状把握にあたっては、まず、A小学校の先生方の自校のキャリア教育についての思いを重視した。現場で児童を直接指導している先生方が、納得できるような計画にならなければ、それはやはり充実にはつながらないと考えたからである。現状把握から、A小学校の先生方は(資料1)のように「様々な体験活動の充実」が、A小学校におけるキャリア教育の強みであると考えていることが分かった。

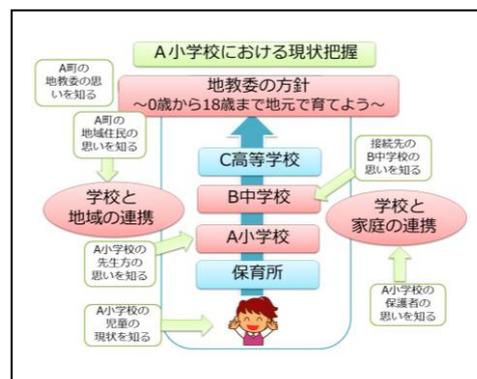


図2 様々な視点からの現状把握

一方で、A小学校の先生方が考える自校のキャリア教育の弱みについても分析したところ(資料

2) のように、「キャリア教育が分からない」「教職員で確認されていない」「総合的な学習の時間の内容に課題がある」などが、意見の中心であることも分かった。このことから、本研究は、キャリア教育をこれから推進していこうとする学校における実践研究であると考えます。

また、その他の現状把握からは、A小学校をめぐる全ての方々は、児童の「学習意欲の向上（学力向上）」を願い、地教委や地域住民については、それに加えて「郷土愛」の高まりも願っていることがうかがえた。（図4）

これをふまえ、A小学校の児童の現状把握を行った。その結果、児童（卒業生を含む）の過去の全国学力・学習状況調査（質問紙調査）等から、「学習意欲」にはやや課題がありそうであることが分かった。また、A小学校の児童の「学習意欲」に課題が見られる原因は、学習意欲の測定に使用した尺度（図13）から「学ぶ意義」を授業の中で十分に実感できていないことに起因しているのではないかと考えた。

一方で「郷土愛」に関しては、これまでA小学校で実施された道徳アンケート等の各種アンケート調査からは、かなり高い傾向があることが分かった。A小学校の児童の「郷土愛」は現段階で十分に育っていることがうかがえた。

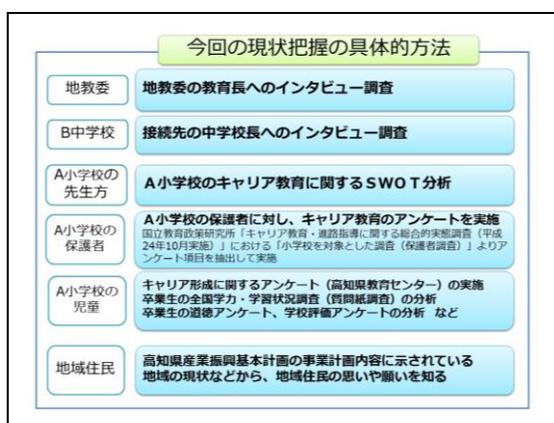


図3 今回の現状把握の具体的方法

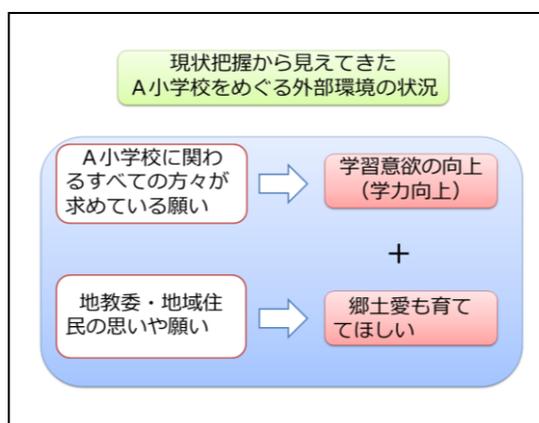


図4 現状把握から見えてきたこと

(3) A小学校の児童の郷土愛が高い理由 ～総合的な学習の時間と道徳教育の関係性～

前述したように、現状把握の結果からはA小学校の児童の郷土愛はここ数年、非常に高い傾向にあることがうかがえる。では、なぜA小学校の児童の郷土愛は高まっているのだろうか。

小学校学習指導要領には、道徳教育と各教科等の関連について、以下のように示されている。

小学校学習指導要領 第1章 総則 p1（平成27年3月一部改正）

第1 教育課程編成の一般方針

2 学校における道徳教育は特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて児童の発達の段階を考慮して、適切に指導を行わなければならない。

A小学校では、いわゆる「道徳教育の視点」を教職員全体で確認をすることをこれまで充実させてきていた。例えば、総合的な学習の時間等における体験的な学習でねらう「道徳教育の視点（道徳性）」は「郷土愛」であるという共通のベクトルができていた。つまり、「郷土愛」に関しては、教職員が同じ方向に向かって指導できているため向上しているのではないかと考えた。

(4) A小学校における「体験的な学習」の課題 ～体験活動の恒例行事化～

A小学校の先生方に記入していただいたキャリア教育のSWOT分析の自由記述を見ると、内部環境や外部環境の弱みとして、体験的な学習に対し、「連続性のある取組がない」「毎年、同じことをしている」「精選されないままなので忙しい」等の記述が見られる。

実はこの点については、A小学校の管理職も同様の見解をもっており、学校長へのインタビューによる現状把握からは「体験活動が断片的であり、連続性に欠けることは課題である。」「体験活動

についての精選も必要である。」等の意見も述べられていた。

体験的な学習を精選しなければならないという思いは、管理職も含め、全教職員がもっているものの、一方で、その精選の基軸となるべきベクトルが見当たらないため、精選が進まないといった側面も存在している現状があるのではないだろうか。そして、結果として体験的な学習が精選されないまま増え続け、体験的な学習の恒例行事化につながっていくという構図が見えてくる。

今回の研究を通して、この辺りの課題についても寄与していきたいと考えた。

(5) A小学校の現状と目標との差をうめるもの ～各教科等の「等」にふくまれるもの～

現状把握から、A小学校は「学習意欲」と「郷土愛」の向上が求められていることが分かったが、前述したように「郷土愛」については、現段階で既に一定高まっていることを鑑み、目指す姿を「学習意欲」の向上の一点に焦点化した上で、この差をうめるために必要なものは何かを探った。(図5)

現状を基にした上で、学習意欲の向上に必要なものを探るため、小学校学習指導要領及び小学校学習指導要領解説(総則編)を再度、読み直した。

その結果、以下の文言を再確認した。

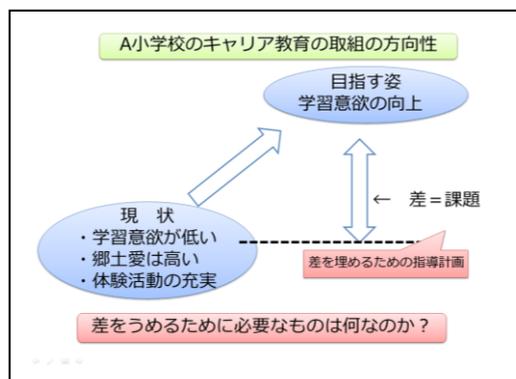


図5 A小学校のキャリア教育の方向性を探る

小学校学習指導要領 第1章 総則 pp15-17

第4 指導計画の作成に当たって配慮すべき事項

- (2) 各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童の興味・関心を生かし、自主的・自発的な学習が促されるように工夫すること。
- (11) 児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。

※小学校学習指導要領解説(総則編) pp52-73にも、「学習意欲」との関連が詳細に記述されている。

各教科等の「等」には、総合的な学習の時間や道徳教育ももちろん含まれている。つまり、総合的な学習の時間や道徳教育においても、体験的な学習や問題解決的な学習を重視することで、児童の自主的・自発的な学習が促進され、それが最終的に学習意欲の向上に生かされなければならないことが明記されているということである。

これまでのA小学校の取組をふり返ってみると、総合的な学習の時間において地域の題材を生かした「体験的な学習」は充実させているが、その学習過程において、「問題解決的な学習」はあまり意識されていなかったのではないかと考えられる。そこでA小学校では、今後、総合的な学習の時間の特質を生かした「問題解決的な学習」として、「探究的な学習」による授業改善を行うことが有効策なのではないかと考えた。(図6)

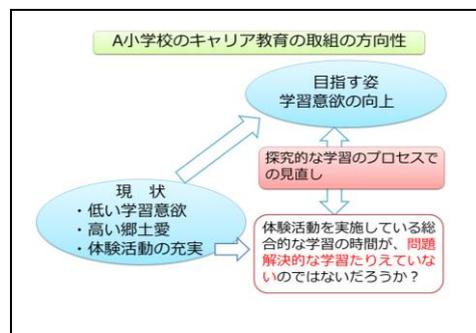


図6 A小学校のキャリア教育の方向性

(6) 総合的な学習の時間における問題解決的な学習

文部科学省(2011)は「総合的な学習の時間における探究的な学習」とは、図7のような「問題解決的な活動」が発展的に繰り返されていく一連の学習活動であるとしている。

このことから「総合的な学習の時間の特質を生かした問題解決的な学習」とは「総合的な学習の時間における探究的な学習」であると考えた。

また、文部科学省(2014)「平成26年度全国学力・学習状況調査報告書・調査結果資料」によると「学校における指導等

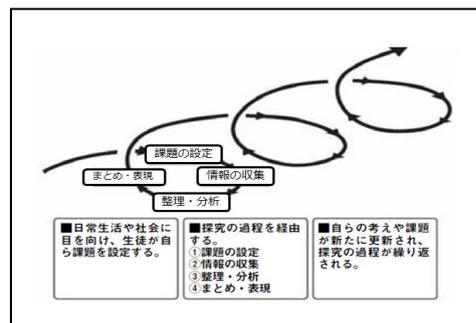


図7 総合的な学習の時間における探究的な学習のイメージ図

と学力等との関係」について、「総合的な学習の時間における探究活動（課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導）を行った小学校・中学校ほど教科の平均正答率が高い傾向が見られ、さらに学習意欲等や家庭での学習時間等との関係も見られる。」との調査研究報告が示されておりこれを科学的根拠 (evidence) として研究を進めたいと考えた。

なお、探究的な学習の指導過程について文部科学省（2011）は、およその流れのイメージとして以下のものを示している。（図8）

- | | |
|---|-------------------------------------|
| ① | 【課題の設定】体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ |
| ② | 【情報の収集】必要な情報を取り出したり収集したりする |
| ③ | 【整理・分析】収集した情報を、整理したり分析したりして思考する |
| ④ | 【まとめ・表現】気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する |

図8 探究的な学習の指導過程のおよその流れ

(7) 本研究におけるキャリア教育の研究としての意義

～「総合的な学習の時間」「道德教育」と「キャリア教育（キャリア発達）」との関係性～

ここまで「総合的な学習の時間」や「道德教育」に関する考察が多くなっているが、これらを深めることで、はたして、A小学校におけるキャリア教育の取組の改善につながるのだろうか。「総合的な学習の時間」及び「道德教育」の目標を改めて確認した。

総合的な学習の時間の目標は以下のように示されている。

小学校学習指導要領 第5章 総合的な学習の時間 p102

第1 目標

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的・創造的・協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

次に、道德教育については、次のように示されている。

小学校学習指導要領 第1章 総則 p1

第1 教育課程編成の一般方針

- 2 道德教育は、教育基本法及び、学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道德性を養うことを目標とする。

以上のように、総合的な学習の時間及び道德教育の目標は、どちらも「児童が自己の生き方を求めていくこと」をねらいとして示している。つまり、これらの実践研究を行うことは、自己の生き方を考えるキャリア教育の取組として十分寄与できると考えられ、とりわけ、児童の「キャリア発達」の向上につながる学習といえるのではないかと考えた。

なお、「キャリア発達」については、文部科学省（2011）の「小学校キャリア教育の手引き」において「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を『キャリア発達』という。」との定義がなされている。

以上、研究目的の項における、現状把握の結果・分析及びその解釈や考察から、「A小学校におけるキャリア教育の取組モデル図」を、図9のようにとらえ研究を進めていくことにした。

なお、このモデル図は、高知県教育委員会（2016）の、第2期高知県教育振興基本計画（案）における「基本理念～目指すべき人間性～」の一つである「郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人材」とも、その方向性は同一であり、他の市町村にも汎用できる可能性があるのではないかと考えた。

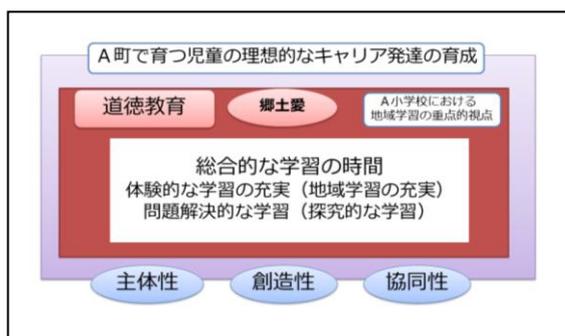


図9 A小学校におけるキャリア教育の取組モデル図

2 研究仮説

(1) A小学校における研究デザイン

現状把握の結果、A小学校におけるキャリア教育の取組モデル図を図9のように考えた。そして、図9の取組モデル図を検証する研究デザインとして図10を考えた。

A小学校は「郷土愛」と「学習意欲」を高めることが地教委等から求められていると同時に、先生方は総合的な学習の時間等の体験的な学習を自校の強みとして考えている。

今回、総合的な学習の時間の体験的な学習により「郷土愛」はすでに一定高まっているため、これを土台とし、「学習意欲」を高める方策について研究していきたいと考えた。

検証授業の結果、総合的な学習の時間において「郷土愛」と「学習意欲」の両者が高まっていることが確認されたとき、それは同時に、A町で育つ児童の理想的なキャリア発達の育成につながっているといえるのではないかと考えた。

(2) 現状把握及びその共有と授業改善のための校内研修

研究成果を今後A小学校全体へと普及させていくことを見通した場合、校内研修を活用し、その中で研究しようとしていることを先生方に伝えるとともに、先生方から意見をいただくことが、A小学校のためにより有効ではないかと考えた。

キャリア教育の校内研修は夏期休業中に合計2回実施した。1回目（7月下旬）は、A小学校をめぐる現状把握の結果や、そこから研究生が読み取った解釈について報告し、先生方と意見交換し2回目（8月下旬）は、1回目の校内研修で共有した現状把握を基に、キャリア教育全体計画と各学年のキャリア教育年間指導計画の具体的な見直しを行った。

今回、実施した全2回の校内研修では、A小学校のキャリア教育の方向性の共有という本来の目的もさることながら、先生方からいただいた授業改善の方向性の示唆は、今回の研究仮説を検証するための、総合的な学習の時間における問題解決的な学習（探究的な学習）の学習指導計画を作成する際にも、大きく影響を与えるものであった。

(3) 研究仮説

総合的な学習の時間における問題解決的な学習として「探究的な学習」のプロセスを取り入れた体験的な学習を実施することによって、児童の学習意欲が高まる。

本研究では、この仮説を検証するために、以下のことを行う。

- ・ A小学校における検証授業の実施・分析
- ・ 児童の学習意欲の向上を測定するためのアンケートの実施及び、その統計的分析
- ・ 学習意欲を向上させるための具体的な手立ての考察

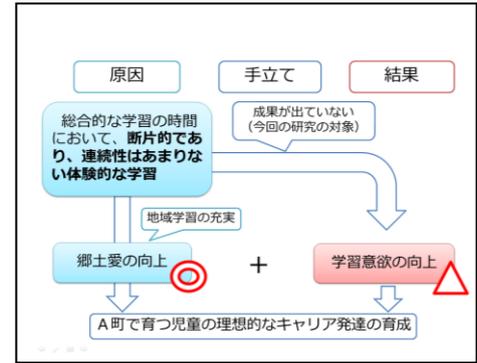


図10 A小学校における研究デザイン

3 研究方法

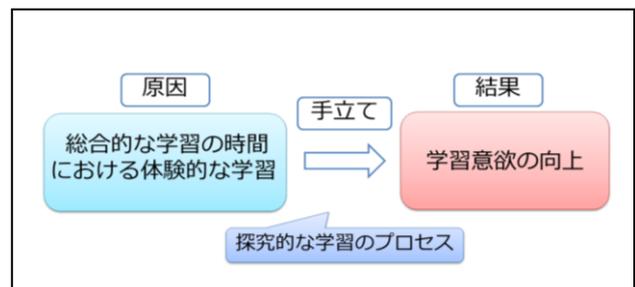
(1) 実践研究の概観

ア 検証授業の計画

【対象児童】 A小学校 第5学年 17名

【授業時期】 平成27年10月上旬～平成27年11月下旬

【授業時数】 総合的な学習の時間（米の学習②）合計24時間



【仮説検証のモデル図】

イ 「米の学習」を選択した理由と、「米の学習②」の具体的改善策

1 (6)で示したように、A小学校における体験的な学習には、体験的な学習の恒例行事化という課題が1年生から6年生まで学校全体で見られ、さらに、その課題認識は管理職も含めた多くの先生方と一致していた。

今回、A小学校において様々に存在する各学年の体験的な学習の中から、検証授業の対象として抽出したA小学校5年生の総合的な学習の時間における「米の学習」についても、課題は同様であった。むしろ、他学年と比較すると5年生という学年は学校行事や特別活動等において、高学年児童として6年生とともに学校全体に影響を与える立場であり、かつ、各教科等における日常の学習内容の分量も多い学年であることを鑑みると、今回の課題改善のための優先順位や早急性は他学年よりも大きいように思われた。

A小学校5年生の「米の学習」は、田植え体験、稲刈り体験、米の販売学習等の体験的な学習は多く設定されているが、これまでそれらが断片的であるという課題が見られると同時に、問題解決的な学習（探究的な学習）の実践という意味での課題でもあった。そこで、5年生の「総合的な学習の時間」において年度当初に実施が計画されている「米の学習（年間39時間）」を図11に示したように大きく3つのまとまりに分け、2学期に実施が計画されている「米の学習②（24時間分）」を検証授業の対象とすることにした。また、「米の学習②（24時間）」を、図12に示したように探究的な学習のプロセスにそった学習指導計画を考えた。なお、図12の指導計画作成に関しては2(2)で記したように、キャリア教育の校内研修において、A小学校の先生方からいただいた示唆を十分参考にさせていただいたことも付記しておく。

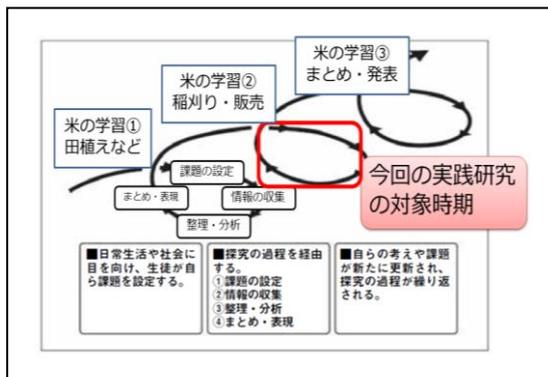


図11 今回（H27）の「米の学習」の年間イメージ

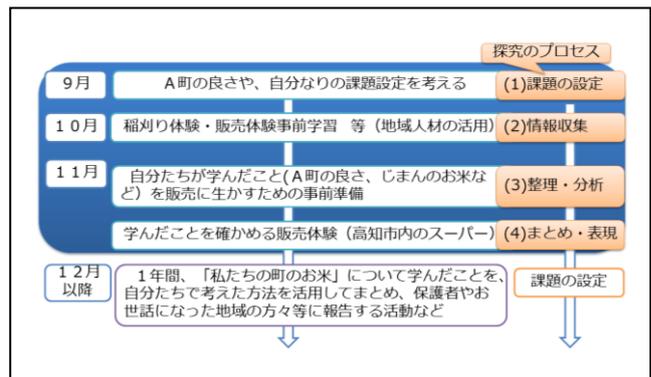


図12 今回（H27）の「米の学習②」のイメージ図

(2) 「学習意欲」を測定するための尺度及び測定時期

学習意欲の検証には、高知県教育センター(2013)「キャリア形成に関するアンケート」(以下、キャリア形成アンケート)の、【教科の学習意欲】の中の「国語及び算数の学習に対する内発的動機」の尺度を使用する(図13)。今回の検証授業(米の学習②)では、国語や算数で学習したことを想起させながら授業を進める場面も多くあることを鑑み、この尺度を使用する妥当性があると判断した。そして、図14に示したように、検証授業の事前・中間・事後の合計3回のアンケートを実施し、その分析をしたいと考えた。

【教科の学習意欲】

<国語の学習に対する内発的動機>

- ・新しい知識を身に付けたいから国語の勉強をしている
- ・国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う
- ・国語の問題は最後まであきらめずに考えている

<算数の学習に対する内発的動機>

- ・新しい知識を身に付けたいから算数の勉強をしている
- ・算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う
- ・算数の問題は最後まであきらめずに考えている

図13 「学習意欲の向上」を測定するための尺度

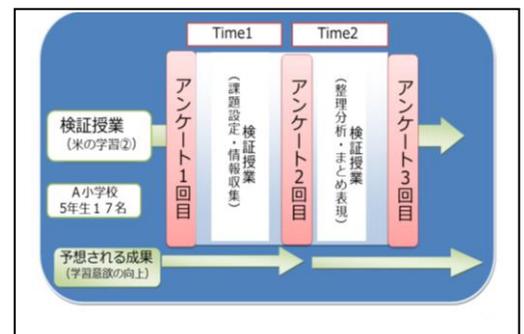


図14 「学習意欲の向上」の測定時期

4 結果と考察

(1) 検証授業における取組の実際 ～昨年度までと、今年度の「米の学習②」の取組の違い～

昨年度までの主な課題点	今年度の主な改善点	児童の姿
探究的な学習のプロセス（１）「課題の設定」		
<p>小学校学習指導要領解説「総合的な学習の時間編」の目標に示されている「自ら課題を見つけること」へ対しての教師側の十分な理解が、これまで不足していた。具体的には、課題設定が授業の中であまり意識されていなかったり、課題設定を教師側が一方的に設定していたりする現状があり、児童が主体的に活動に取組みにくい状況にあった。</p>	<p>「販売体験でお米を売るときに、どんなことを伝えればよだろう」と児童に投げかけた。児童の「A町の良いところをアピールしたらよい。」との意見をふまえ、思考ツール（ベン図）を活用して協同的に学び合った。A町の良さをさらに知るために「地域の方々から情報を収集したい」という動機づけにつなげたいと考えた。</p> <p>児童一人一人には、この単元を通して、自分なりに探究していきたいと思う学習課題を設定させた。</p>	<p>【児童が自分なりに立てた学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・A町の良さをもっと深く知りたい。 ・お米を買ってもらえるように、お米の良いところをたくさん言いたい。 ・お米を買ってもらえるように態度を良くしたい。 ・人前で緊張するので、大きな声で明るく販売できるようにしたい。 ・どうやったらたくさんのお客さんを売り場に呼び込みことができるか考えていきたい。 <p style="text-align: right;">等</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 80%;"> <p>【児童が自分なりに立てた学習課題に対しての教師の手立て】</p> <p>児童一人一人の課題意識を肯定的にとらえながらも、全員に共通する学習課題として、「A町の良さを知る」という課題があることに気付かせた。</p> <p>【検証授業における具体的な手立ての一例】</p> <p>例えば、「大きな声で販売したい」と学習課題を立てた児童には「大きい声でどんなことを言えばいいかな」と声をかけ、「態度を良くしたい」と課題を立てた児童には「態度を良くして、それでどうしたらいいかな？」と声をかけ、一人一人の学習課題がより具体的になるように声をかけた。</p> </div>		
探究的な学習のプロセス（２）「情報の収集」		
<p>「稲刈り体験」などの体験的な学習が、ゲストティーチャーにおまかせになっている現状があり、学習内容も地域の良さのみをクローズアップしたものが多かった。児童にとっては、「楽しい」だけで終わる活動が多く、教師にとってはこれらの体験的な学習で「情報を収集させる」という意識があまりなかったように思う。また、他教科との関連も意図的に計画できていなかった。</p>	<p>ゲストで来ていただく地域の方々事前打ち合わせを十分に行い、地域で生きていく上で課題になっていると感じることについても、それぞれの生活者の立場から、率直に話していただいた。</p> <p>T P P問題、地産地消、安心・安全な食材づくり（社会科）や、割合（算数科）など教科との関連も意図的に図った。</p>	<p>それぞれの授業の中で児童が主体的に地域の方々に質問をする時間を設定し、その後、授業者から地域の方へインタビューする形式をとった。児童のワークシートからは以下のような記述が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域を生かすためにはいろいろな方法があることを知った。 ・A町の良さを多くの人に知ってもらいたいと思った。 <p style="text-align: right;">等</p>
探究的な学習のプロセス（３）「整理・分析」		
<p>「情報の収集」と同様に、児童にとっては楽しいだけの学習になっていた。教師にとっては児童に、これまで収集した情報を「整理・分析」させるという意識や、他教科との関連を図ることについての意識があまりなかったように思う。</p> <p>販売体験に使用するための「幟（のぼり）作り」や「ポップ作り」についても、教師側から一方的に提案し、作業的に取り組ませている、現状があった。</p>	<p>地域の方々から収集した情報（A町の良さ）について、何をどのように表現すると伝わりやすいかについて、児童同士が協同的に話し合いながら、幟やポップを作成していった。</p> <p>情報を整理するために思考ツール（ダイヤモンドランキング）を活用した。</p> <p>他教科との関連を図るため、単位量あたりの大きさ（算数）を想起させ、1kgあたりのお米の価格を計算させたり多くのお米を買った方が、お買い得感を得られるような価格設定を考えさせたりした。</p> <p>文字の大きさ（国語）を想起させ、漢字よりひらがなをやや小さめに書くことや、文字の中心をそろえてバランスよく書くことを想起させた。</p>	<p>児童のワークシートからは以下のような記述が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちが一番伝えたいことは「にこまる（米の品種）」と「お米のおいしさ」なので、友だちと話し合って「にこ（まる）で笑顔」というキャッチフレーズを考え、幟やポップに書きました。 ・一番伝えたいことは「おいしいお米」「自分たちで育てたこと」なので、それを、文字の大きさや、文字のバランスを考えて、幟やポスターに書いていきました。 ・お客さんが思わず立ち止まってくれるようなポスターを書きたいと思い友だちと相談しながら書きました。 <p style="text-align: right;">等</p>
探究的な学習のプロセス（４）「まとめ・表現」		
<p>教師が児童へ行う直前学習での指導が、当日の持ち物確認や、校外学習での態度面の指導のみにとどまっております。</p>	<p>直前学習では、「教室で準備してきたことを実際に販売体験で生かそう。そして、どの情報が使えて、どの情報が</p>	<p>児童の感想文からの以下のような記述が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・接客のとき、〇くんが「いらっしゃ

教師側の事後評価も、無事に販売学習を終えたかどうかの「アウトプット評価（実践そのものの評価）」のみにとどまっていた。

「販売体験」でお米を完売させて児童も教師も満足しており、「販売体験」が「手段の目的化」していた。

販売体験と一緒に実施する高知市のスーパー側とも、販売当日の段取りの打ち合わせに終始し、お互いにどのような児童の成長につなげたいと考えているのか共有できていなかった。

「使えなかったのか確かめよう。」と児童に伝え、「アウトカム評価（実践によって得られた成果や効果）」につながるような児童への声かけを意識した。

高知市のスーパー側との打ち合わせをする際に、販売当日の段取りを打ち合わせすると同時に、この販売体験でお互いにどのような成長を期待しているか話し合いベクトルを合わせた。

今回、特にベクトルを合わせたことは、「地域の良さや生産者の思いを、自分の言葉でお客さんに伝えること」を通して、地域への思いを育てたいということであった。

いませ」と大きな声で自分から言っていたので、私も（自分からお客さんに近づいていって、A町とお米の良さをアピールしよう）と考えて、大きな声で「日本一になったお米と同じ味なのに安いですよ」と一生懸命アピールしました。お客さんがいない時に、どうしたらいいか考えました。授業で言っていた「おいしい空気・おいしい水・寒暖差がそろっておいしくて甘いお米」ということを考えたのを思い出して、思い切って言ってみると、お客さんが来てくれました。等

(2) キャリア形成アンケートにおける「学習意欲」の統計的分析の結果

A小学校5年生の17名の対象児童に対して図14に示したように、合計3回のキャリア形成アンケートを実施した。

まず、図13に示したキャリア形成アンケートの中の【教科の学習意欲】に関する6つの質問項目の回答結果が、パラメトリック検定の前提である正規性の仮定を満たすかを検討するため、アンケート1回目から3回目のそれぞれのアンケート結果の分布をKolmogorov-Smirnov検定（以下、K-S検定）により検討した。その結果、全3回とも、P値=.000となり、P値<.05であるため、それぞれのアンケート結果が正規分布であるという帰無仮説が棄却され、非正規分布であるという結果となった。（図15）

そのため、検証授業における図14に示すアンケート1回目～3回目のうちの、①2時点間の比較データ間の差を見ること、②17名の児童は全員が同じ指導を受け比較データ間の対応性はあること、③サンプル数に制限のない検定であることなどの条件から、ノンパラメトリック検定の中でも「対応のある2つの群の中心位置の違いを検定する」ことに適した、符号検定及びWilcoxonの符号付き順位検定を採用した。

図16は、1回目と2回目の学習意欲に関するアンケートの中央値の有意差を示したものである。符号検定が、P値=.015、Wilcoxonの符号付き順位検定が、P値=.004となり、P値<.05であるため、「学習意欲の中心値の間に差がない」との帰無仮説が棄却された。すなわち、アンケートの1回目と2回目「学習意欲」の中心値には統計的に有意な差があるといえる結果となった。

図17は、1回目と3回目の学習意欲に関するアンケートの中央値の有意差を示したものである。符号検定が、P値=.049、Wilcoxonの符号付き順位検定が、P値=.012となり、P値<.05である

	帰無仮説	検定	有意確率	決定
1	学習意欲1の分布は平均3.30および標準偏差0.806の正規分布です。	1サンプルによるKolmogorov-Smirnov検定	.000 ¹	帰無仮説を棄却します。
2	学習意欲2の分布は平均3.53および標準偏差0.656の正規分布です。	1サンプルによるKolmogorov-Smirnov検定	.000 ¹	帰無仮説を棄却します。
3	学習意欲3の分布は平均3.48および標準偏差0.656の正規分布です。	1サンプルによるKolmogorov-Smirnov検定	.000 ¹	帰無仮説を棄却します。

漸近的な有意確率が表示されます。有意水準は.05です。
¹Lillieforsの修正

図15 アンケート1回目～3回目のK-S検定の結果

	帰無仮説	検定	有意確率	決定
1	学習意欲1～学習意欲2の差の中央値は0です。	対応サンプルによる符号検定	.015	帰無仮説を棄却します。
2	学習意欲1～学習意欲2の差の中央値は0です。	対応サンプルによるWilcoxonの符号付き順位検定	.004	帰無仮説を棄却します。

漸近的な有意確率が表示されます。有意水準は.05です。

図16 アンケート1回目と2回目の中央値の差

	帰無仮説	検定	有意確率	決定
1	学習意欲1～学習意欲3の差の中央値は0です。	対応サンプルによる符号検定	.049	帰無仮説を棄却します。
2	学習意欲1～学習意欲3の差の中央値は0です。	対応サンプルによるWilcoxonの符号付き順位検定	.012	帰無仮説を棄却します。

漸近的な有意確率が表示されます。有意水準は.05です。

図17 アンケート1回目と3回目の中央値の差

ため、アンケートの1回目と3回目の間においても「学習意欲」の中心値には統計的に有意な差があるといえる結果となった。

なお、2回目と3回目の学習意欲に関するアンケートの間には有意差が出なかった。しかしながら、図15において1回目～3回目のアンケートのそれぞれの平均値を見た場合、1回目と比較して、2回目と3回目は平均値が高い状態にあることが分かる。このことから、2回目の3回目の比較については、アンケート結果が高止まりした状態であるため有意差が出なかったと考えた。

以上の統計的分析の結果から、今回の検証授業におけるA小学校5年生の児童の「学習意欲」に関してはアンケートの1回目と2回目の間、すなわち「課題の設定」と「情報の収集」で、ある一定高まったものが、少なくとも3回目のアンケートを実施した検証授業の終了時点まで継続していたのではないかと考察した。

今回の統計的分析には、IBM SPSS Statistics 23 を用いている。

(3) 「課題の設定」を考察する理由 ～難易度の高い「課題の設定」の学習～

キャリア形成アンケートの「学習意欲」を統計的に分析した結果、A小学校5年生の学習意欲には、検証授業の事前・中間・事後で有意差が見られた。もちろん、この間、総合的な学習の時間における検証授業のみを児童に介入していったわけではない。学級担任による学級経営を基盤とした日常の教育活動や、家庭教育、社会教育等からの介入の方がむしろ大きいと思われる状況下において、キャリア形成アンケートの結果のみをもって、検証授業の有効性を述べることはできない。しかしながら、考察の項では、そのような前提を明確にした上で、今回、なぜ児童の「学習意欲」が向上したのかを、統計的分析を手がかりに検証授業の中から考察してみたい。

統計的分析によると、4(2)で示したように、キャリア形成アンケートの「1回目と2回目」「1回目と3回目」には有意差が見られるものの、「2回目と3回目」は平均値がほぼ同様の結果であることから有意差は見られ、児童の学習意欲は、「単元の前半」である一定高まったものが、「単元の後半」に持続したととらえることができるのではないかと考えた。

単元の前半(図14における1回目と2回目の間)の学習活動は、探究的な学習のプロセスでいうと、「課題の設定」と「情報の収集」である。両者とも、それなりの授業改善と手立てを加えた上で検証授業に臨んだものの、ここでは紙面の関係上、教育実践的に提案性が高いと思われる「課題の設定」にしぼって考察をしていきたいと考える。

これは田村(2015)の「4つのプロセスの中でも、とりわけ難易度が高いのが、『課題の設定』と『整理・分析』である。なぜなら、この2つはなかなか授業としてイメージしにくく、実現も難しい。一方『情報の収集』『まとめ・表現』はすぐにイメージできる。」との見解に基づいて選択している。

(4) 単元の前半で「学習意欲」が向上した理由

～児童の学習状況に応じた「教師の適切な指導」を目指して～

「課題の設定」の授業では、児童が「A町の良さについてもっと調べたい」と動機づけられ、地域の方々から情報の収集する必然性を感じさせる授業を行いたいと思った。そこで、思考ツール(ベン図)を活用し、児童がお互いにA町の良さについて話し合った後、A町の良さをもっと知るためには、学校内で友人と協同的に学ぶだけでは限界があることに気づかせたかった。

しかし、児童が思わず探究したくなるような課題との出会いができたかどうかは疑問が残る。なぜならば、児童が自分なりに立てた学習課題を見てみると「販売に向けてA町の良さをもっと深く知りたい」「お米の良いところをたくさん知りたい」といった授業者のイメージに合致する学習課題を設定した児童がいる一方で「大きな声で明るく販売したい」「笑顔で態度良く販売したい」など自己の態度面を学習課題として設定している児童もいたからである。私個人としては、児童の課題意識が想定より多様であったため戸惑ったことも事実である。この現象は、「課題の設定」において、児童が思わず探究したくなるような課題に十分に出会わせられなかったことに起因し

たものではないかと考えた。しかし、本単元はすでにスタートしてしまっている。今後、どのように単元を進めていくかは相当考えた。

小学校学習指導要領解説（総合的な学習の時間編）には、以下のように示されている。

小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 p33

第2節 内容の取扱いについての配慮事項

(1) 第2の各学校において定める目標及び内容に基づき、児童の学習状況に応じて教師が適切な指導を行うこと

総合的な学習の時間においては、(中略) 児童の主体性や興味・関心を十分に生かすことが望まれる。しかしそれは、教師が指導を行わなくてもよいということの意味するものではない。ところが、これまで、支援者としての教師の役割が誤解され、必要な指導をためらい教育的効果が十分に上がらない事例があった。また逆に、指導事項を必要以上に教えすぎてしまうことによって、児童が自ら学ぶことを妨げるような事例も見られた。

ここに示されている「教師の適切な指導」とは、児童の課題意識が多様であること受け入れ、児童の主体性であると判断してそのまま単元を進めることなのか、教師が当初ねらった方向へと方向づけることなのか、どちらなのだろうか。今回出した結論は、後者の教師が当初ねらった方向へと方向づけるという選択であった。その際、留意したことは、児童の立てた学習課題を否定するのではなく、あくまでも肯定的に受け止めながら、児童の思考を深めるという事であった。

例えば「大きい声で販売したい」という課題を設定した児童がいたとすると、「販売の時に大声を出したいわけじゃないよね？何を大きい声で伝えたいのだろうか？」などと問いかけていくことで、児童一人一人の課題意識は違うものの、その背景には「A町の良さを知り伝える」という全員に共通する学習課題があることを児童に示した。

このように、教師側が予想しなかった学習課題を児童が設定する可能性は十分にあると思うが、その際の「教師の適切な指導」は、「手立てをうつこと」「手立てをうたず見守ること」のどちららであるべきか。この判断は非常に重要かつ難題でもあるように思った。

しかしながら、昨年度までは、課題そのものを設定できていなかったり、教師側が一方向的に課題を設定したりしてきた現状を鑑みると、今回の検証授業において①児童一人一人の自分なりの課題意識を教師側が肯定的にとらえること、②児童全員に共通する学習課題を確認したことは、単元の前半での学習意欲の向上に寄与したのではないかと考えた。

(5) 単元を通して学習意欲が「持続」した理由

このように、今回の検証授業では、「課題の設定」において、最終的に教師側から「A町の良さを知り伝える」という全員に共通する学習課題が背景にあることを児童に示した。

その後の「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」のそれぞれのプロセスでは、毎時間「①児童の自分なりの学習課題」と「②全員に共通する学習課題（A町の良さを知ろう）」の2種類の学習課題を常にワークシートに記入させ意識させてきた。

また、これまで各教科等で学んだことが、今回の「米の学習」につながっていることを意識づけるために、各教科等で学んだことを総合的な学習の時間の中で想起させ、各教科等で学んだことが今回の学習や日常生活の中で生かされていることを意識させた。

その一部を以下に紹介する。

探究のプロセス	単元名（教科名）	各教科等とのつながりを意識させた場面
情報の収集	割合（算数）	販売体験における売上に関して、学校側とスーパー側の配分割合を基に、例えば、11万円の売上が当日あった場合、それぞれの配分はいくらずつになるのか、電卓を使用して計算をさせた。
情報の収集	T P P 問題（社会） 地産地消（社会）	「情報の収集」で関わった多くの地域人材の方々に、T P P 問題や地産地消等について、現在、率直にどのような思いを抱いているのかインタビューした。特にT P P 問題に対して賛成の方と、反対の方のお話を聞くことができた。
情報の収集	米の消費量と生産量の変化、 米づくりの未来を考える（社会）	地域人材の方にインタビューを行った。その中で、A町の良いところや、自分のしている仕事（農業）のやりがいなどと同時に、A町が直面する少子高齢化や後継者問題などの課題についても、一歩踏み込んで率直にお話をいただいた。

整理・分析	文字の大きさ（国語）	4年生の書写の学習で学んだ「文字の大きさ」の学習を想起させ、ポップやポスターを作成する際には、漢字よりもひらがなを少し小さめに書くことなどを想起させた。
整理・分析	単位量あたりの大きさ（算数）	米の販売価格を決める際に、2kg、3kg、5kgについて仮に設定した価格のお米1kgあたりの価格をそれぞれ計算させ、たくさんのお米を購入した方がお買い得感を得るような価格設定を話し合いで決めた。

以上、「課題の設定」から「まとめ・表現」までの過程において、児童にとっては、ある一定この学習を「学ぶ意義」を感じ、各教科等とのつながりも感じられたため、「学習意欲」は向上し、持続したのではないかと考察した。

5 成果と課題

(1) 成果

- 総合的な学習の時間における探究的な学習により学習意欲が向上することが確認されたことで、今回、現状把握から分かったA小学校において求められる人材育成（郷土愛と学習意欲の向上）へつながる道筋が見えてきた。
- 今後、1(7)の取組モデル図をA小学校における「キャリア教育」の中心的な考え方として学校に提案し、体験的な学習の精選については、探究的な学習のプロセスを精選の基軸としてスクラップや、ビルドまたは改善をしていきたい。

(2) 課題

- 今回、児童のキャリア発達につながる総合的な学習の時間に取り組む中で、様々な課題が見えてきた。①児童の学習意欲につながる「課題の設定」の工夫、②児童が自分の学習課題をふりかえり学習したことをつなげられる工夫、③意図的・計画的に各教科等とつなげる工夫等の課題については、今後も研究を続けたい。
- 今年度は、総合的な学習の時間における探究的な学習をA小学校のキャリア教育の中核にすえたモデル図として提案したが、来年度は、各教科等における問題解決的な学習にも力を注ぎ、その両輪によって、児童の学力向上につながるキャリア教育の取組を学校全体で進めていきたい。

【主な参考・引用文献等】

- 文部科学省（2008）：小学校学習指導要領
 文部科学省（2008）：小学校学習指導要領解説 総則編
 文部科学省（2008）：小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編
 文部科学省（2011）：今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 小学校編
 文部科学省（2011）：小学校キャリア教育の手引き<改訂版>
 文部科学省（2014）：平成26年度 全国学力・学習状況調査 報告書・調査結果資料
<http://www.nier.go.jp/14chousakekkahoukoku/>
 国立教育政策研究所（2014）：キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書、P D C Aサイクルを基盤としたキャリア教育の在り方、一基礎的・汎用的能力の育成とその評価を中心に一、実業之日本社 pp47～54
 国立教育政策研究所（2014）：キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書、一ニュージーランドにおけるキャリア教育の評価一、実業之日本社、pp152～156
 国立教育政策研究所（2013）：キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査、第1次報告書及び第2次報告書
 高知県教育委員会（2016）：第2期高知県教育振興基本計画（案）
<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310101/2016011800230.html>
 高知県教育センター（2013）：キャリア形成に関するアンケート（小中学校版）
<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310308/2014061600084.html>
 藤田晃之（2014）：キャリア教育基礎論、一正しい理解と実践のために一、実業之日本社
 田村学（2015）：授業を磨く、東洋館出版社
 田村学（2015）：総合的な学習の時間の単元計画、広島県教育委員会「広島版『学びの変革』アクション・プラン」より
<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/global-manabinohenkaku-actionplan/global-trainingprogram.html>
 大谷俊彦（2014）：平成26年度教育研究論文集、キャリア教育の視点に立った学校改革、～キーワードは「つなぐ」～、日本教育公務員弘済会高知支部
 樋口耕一（2014）：社会調査のための計量テキスト分析、内容分析の継承と発展を目指して、ナカニシヤ出版